

2022年4月10日

人間の弱さを貫く神の御業

ルカ 23 : 13~25

• 受難週を迎えて

週報に記していますように、今日の「棕櫚の主日」から受難週に入ります。昨年度、オルガン奏楽者の会において、教会の1年の暦であります「教会暦」について学びました。イースターの前の週の礼拝を、高知教会では「受難週礼拝」と呼んでいますが、一般的には「棕櫚の主日」と言います。ちょうどその時が、エルサレムにイエス様が入れられる時にあたっています。人々が道に木の枝を敷いて歓迎したことから、「棕櫚の主日」と呼ばれるようになりました。そして、教会暦の学びにおいてとても心に残ったのは、受難週は、十字架に向かわれるイエス様の1週間の歩みを私たちが追体験をして過ごすということであるということなのです。世々の教会は、そうして、この1週間を過ごして、そして、復活日、イースターを迎えてきたということを強く思わされたのです。

改めて言う前もないことですが、この1週間において、つまり、イエス様が十字架に向かう道筋で受けられたのは、大きな苦しみでした。何を当たり前のことを言っているのかと思われたかもしれません。しかし、このことをまずは私たちは受け止めなければならないと思わされたのです。イエス様が苦しみを受けられた、これは、私たちにとってとても大切な言葉です。そして、この受難週においても、私たちが繰り返し口にする言葉です。繰り返し口にするからこそ、逆にその生々しさを失ってしまうのかもしれません。「私たちは罪人であり、私たちの罪を赦すためにイエス様は十字架で苦しまれた」、私たちはまるで数学の公式を言うように、すらすらと言っているのかもしれませんが。また、イエス様は、十字架での死から復活される。その後の姿を知っていますので、ここでの苦しみは復活を祝う前段階のような感じになっているのではないかと思う時があります。しかし、イエス様は実際に苦しまれたのです。これは、生々しい言葉です。全ての人に捨てられ、死に向かう道を進まれたのです。「わが神、わが神、なにゆえわたしをお見捨てになりましたか。」、そう叫ばれたのです。それが、その叫びに示されているのが、イエス様のこの1週間の姿です。今年も私たちは、イエス様の十字架に向かうお姿を辿り、その苦しみの意味を改めて問いながら、受難週の1週間を過ごしていきたいと思えます。

• 不当な裁判の姿

今年の受難週礼拝では、イエス様の裁判の姿をご一緒に迎っていこうと思います。イエス様は、捉えられて、まずユダヤの法廷である最高法院で裁判を受けました。偽りに偽りを重ねるようにして死刑の方向が定まるのですが、人々はそのイエス様をピラトの許へと連れて行くことになりました。ピラトは当時のユダヤの総督だったので、イエス様が生きられた時代、イエス様の国ユダヤは、当時世界を統治していたローマ帝国の支配の下にありました。ローマ帝国の統治の仕方はとても巧妙で、日常の事は支配している地域の国の人たちに任せて、重要なことは総督が最終的に判断をくだしていく、そういう体制を取っていました。そして、このピラトは、ローマ帝国によってユダヤに派遣されていた総督だったので、ユダヤの人たちは、総督に死刑にすることへの許可を求めるために、ピラトの許へ連れてきたのです。ピラトは、イエス様を尋問します。その結果として、訴えられているような罪を見出すことは出来なかったのです。それで、ピラトは一旦ユダヤ人の王であるヘロデの許へ送るのです。その思いに込められているのは、このことに関わりたくないという思いだったと思います。それで、ヘロデの許へ送り返したのです。しかし、その後再びヘロデの許からピラトのところへイエス様は連れて来られたのです。ここに、ユダヤの指導者たちがどうしてもイエス様を死刑に処したいと思っている、その強い思いが示されているように思います。

ピラトの下での裁判は、驚くような経過を迎えていくこととなりました。14節でピラトはこう言っています。「わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男に何も見つからなかった。」と。イエス様に向けられた嫌疑は事実ではない、妬みによることが彼には分かったということなのです。それで、鞭で懲らしめる、そういう形で手を打ったらどうかと、彼なりの提案をします。できれば、無実の罪で死刑判決を受けようとしているイエス様を、こういう形で助けたいと思ったのです。そういうピラトなりの思いがあったと思います。無実の罪を着せられていることは明らか、そして、数日前に人々には熱狂的に迎え入れられた。だから、「イエスを許せ」という言葉を期待したのです。

しかし、彼の思った通りには事は進まなかったのです。人々は「その男を殺せ、バラバを釈放しろ」と叫ぶのです。そして、イエス様を釈放しようとのピラトの思いに対して、「十字架につけろ」と群衆は叫び続けるのです。更に、三度目「鞭で懲らしめて」と言うピラトの言葉に対して、十字架につけることをあくまで要求し、その声はどんどん強くなってきたのです。とうとう、ピラトは人々の要求を受け入れることにし、バラバを釈放し、イエス様を十字架にかけるところを許可することになったのです。

・ピラトに表れている人間の弱さ

これは、ピラトにとって、思いもしない展開でした。けれども、落ち着いて考えてみれば、ピラトは総督です。当時のユダヤにおいて、全権を握っているような存在だったのです。彼の一存で、イエス様を釈放することも当然できたのです。ところが、彼はそうしなかったのです。人々が高揚しているのを目の当たりにし、暴動になりそうに感じたのです。そして、実際に暴動になったら、総督としての統治能力が問われることになりかねないと思いました。「イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた」、ここに、ピラトの思いがよく出ているように思います。他の福音書では、イエス様を十字架にかけ、その責任は私にはないと明言しました。お前たちが勝手に殺した、そういうことにするとしたのです。言ってみれば、彼の自己保身です。その結果として、イエス様が十字架にかけられていくことになりました。私はこう言うピラトの姿を思う時に、本当に悲しいまでの人間の弱さが示されているように思います。絶対的な権力を持っている、そういうピラト中に凝縮して表わされている、悲しいまでの人間の弱さを思わされるのです。

もちろん、このことは、ピラトは駄目な人間だなあとすることはできないと思います。ここまで、ピラトの姿を辿ってきましたが、誰もが、自分も思い当たることが有るのではないかと思います。自分弱さが、ピラトの姿を通して表わされているように感じられるのではないかと思います。私も、自分の身を守ろうとして、ある人を結果として貶めてしまうことになったという、本当に心に痛みとして深く残っている経験があります。最初からその人を貶めようと思ったわけではないのです。その人のためと、自分なりに努力したつもりだったのです。しかし、結果としてピラトのように、最後の最後に逃げ出すようになってしまったのです。それは、今も深い痛みとなっていることです。その自分の姿を、ピラトの姿を通して思わされるのです。

ですから、私たち人間の罪の姿が、このピラトの姿にはっきりと示されているのです。つまり、イエス様が裁判を受ける、その姿を受け止める時、ピラトの姿に映し出されている私たちの姿、私たち罪の姿を直視せざるを得ないのです。そして、その罪が、結局、イエス様を十字架につけてしまうのです。そこまで至ってしまう。そのことが、このピラトの姿にはっきりと示されているのです。ピラトの姿は、私たち一人一人の姿なのです。そのことをまずは受け止めなければならないのです。

・罪の現実が表れている

そして、今回の説教の準備のためにこの言葉に向き合わされて、とても考えさせられたことが有りました。それは、群衆はなぜ釈放される者としてバラバを選んだのか

ということです。

ここに「暴動と殺人のかどで投獄されていた」とあります。「暴動」と言われているように、恐らくローマへの反乱を起こして、人を殺めてしまったということで投獄されているのです。そのバラバが、人々から支持を受けているのでしょうか。例えば、この後、釈放されたバラバを旗頭として、ローマ帝国への抵抗運動を強めていく、そういう目的でバラバの釈放を求めたのでしょうか。そうではないのです。勿論聖書には、この後のバラバの姿は一切出てきません。歴史の記録を辿っても、イエス様が十字架にかけられた時期に、ある者を指導者として大規模な反乱がおこったということもないのです。バラバは、単に釈放されに過ぎないのです。ではなぜ、人々はイエス様ではなくバラバの釈放を求めたのでしょうか。その理由は結局一つだと言ってよいと思います。イエス様を十字架にかけるためです。イエス様かバラバかとなったから、人々はバラバの釈放を求めた、そういうことであると思います。こういうことに、人々のイエス様に対する強い敵意が示されていると思います。

祭司長や長老と呼ばれている当時の指導者たちは、イエス様を葬り去ろうと強く願っていました。それは、イエス様が自分たちの地位を危うくしているということだけではないのです。彼らは、神様の御心に従う、その思いの中でイエス様を葬り去ろうとしているのです。彼らが当然として受け取っていた神様の御姿がありました。それは、神様は神の民イスラエルをこそ救ってくださるということでした。神様が選ばれたということにおいて、自分たちは特別の民と思ったのです。正しいイスラエルの民をお救いになる。彼らが当然の前提としていた神様の御心を、イエス様は歪めていると思ったのです。彼らのとって救いの外にいると受け止めていた徴税人や罪人たちと共に交わっていたからです。神様を冒瀆している。それは、当時の指導者たちの思いでした。だから、神様の御心と思って、イエス様の死刑を願ったのです。

そして、人々。数日前、ほんの数日前には、エルサレムの人々は、こぞって歓喜を持ってイエス様を迎えたのです。新しい王の到来を、心から祝ったはずだったのです。歓迎したのです。その人々がまるで掌を返したように、「十字架につけよ」と絶叫しているのです。確かに人々は、指導者たちに扇動をされていたのです。それで、「バラバを釈放しろ」、一方で「イエスを十字架につけよ」と叫んでいるのです。しかし、人々も単に扇動されたというだけではありませんでした。人々自身も、自分たちが期待していた救い主とイエス様は全く違うと思っています。ローマ帝国の圧政に対して、立ち上がってくれる。敵をなぎ倒して、イスラエルの国を再興してくださる。そういう彼らの期待していた救い主の姿とイエス様の姿は大きく異なっている。その深い失望が、結果として「バラバを釈放しろ」という大合唱になっているのです。それが、こ

の時の人々の姿なのです。

ですから、バラバが許されなければならない必然性があったということではないのです。あくまで、イエス様を十字架にかけるとして、バラバが釈放されることになるのです。それが、バラバの姿なのです。それほどまでに、イエス様を十字架につけるといふ思いが、人々に強くあったことを思われるのです。

そうして、この裁判の場面を受け止めてきますと、本当に人間の罪の現実がいかに深いものであるのか。ピラト、当時の宗教的な指導者たち、群衆、それぞれの姿を通して、人間の罪の現実が噴出している、そういう姿を受け止めずにはいられないと思います。そして、この現実から自分は無縁だと言える人は、恐らく誰もいないと思います。私たちがまた、イエス様を十字架にかけることになった人間の一人であると、告白せざるを得ないと思います。

・罪の現実の中で起こる神の救いの御業

そうしますと、今日の箇所は人間の罪の現実が噴出している、そのことで終わっているのでしょうか。そうではないのです。ここに示されているのは、驚くような神様の御業なのです。この裁判の結果として、一体何が起こったのでしょうか。勿論、イエス様の十字架なのです。この後、時を置かずにイエス様は十字架に磔になるのです。しかし、子の十字架が起きているのは、この裁判を経てなのです。敢えて分かりやすく言いますが、この裁判を経なければ、十字架は起こらなかったのです。つまり、ここに示されているのは、人間の罪の現実だけではありません。そのような人間の罪の現実をさえ神様はお用いになり、救いに御業を実現されるのです。その驚くような神様の働きを、私たちはここで見せられていくのです。

受難週を過ごす時、私たちは思うのです。イエス様の苦しみを本当に分かっているのかと。しかし、そこで忘れてならないのは、私たちがちゃんとイエス様の苦しみの意味を知り、理解できるようになれば、つまり、十字架の恵みを受けるに相応しい者となることが出来れば、イエス様の十字架が意味を持つということでしょうか。そうではないのです。私たちは、イエス様の苦しみの意味を問います。しかし、どこまで行っても不十分だと思います。そういう私たち人間をご覧になって、イエス様はそんな状態だから十字架につくことをやめられるのでしょうか。そうではないのです。この人間の罪が噴出しているような状況の中で、イエス様は十字架への道を一心に進んでいかれるのです。そして、そこにイエス様の十字架の贖いが、人間の期待や願望に応えるものではなく、神様が一方的な恵みの出来事として引き起こしてくださっていることがここにはっきりと示されているのです。ですから、ピラトの許での裁判の場

面は、人間の罪が噴出している場であると共に、いやそれ以上に、神様の人間を救いたいという御意思がいかに強いものか、そのk+が示されている場でもあるのです。

そして、今回、説教の準備をしながら、大きな示しがあったように思います。この不当な裁判の場面で、神様の救いの恵みの意味を私たちに具体的に証しをする存在がいることを思わされたのです。それは、「バラバ」です。先程も一緒に確認しましたように、バラバには釈放される理由はありませんでした。ただ、イエス様を葬るために、そのために釈放する者としてバラバが選ばれた、それに過ぎなかったのです。こうなったことを、イエス様はどう思われていただろうかと思えます。私の代わりに、理由のないバラバが許されるなどけしからんと思われたのでしょうか。勿論、そうではないと思います。自分が命の代わりに、一つの命が救われる。このことを喜びとして受け止められたに違いないのです。そして、バラバは、驚いたと思います。突然、釈放されることになったのですから。そして、どうして釈放されることになったのか、彼自身も全く分からなかったと思います。ただ、自分の身代わりとして、十字架につくことになった存在がいたということなのです。

私は、このバラバの姿に、私たちの救いの姿が示されていることを思います。私たち自身の中に、神様の救いに与る根拠があるわけではないのです。裁かれて当然、それは本来私たちが進む道だったのです。バラバが、この時までそうだったようにです。しかし、裁判の場面で、一変するのです。死ぬはずであった者が生きる者になったのです。イエス様が、御自身の命を捨ててくださったからです。同じように、私たちも思いもしない形で、神の子として生きる道が与えられたのです。ただただ神様の御意思によって起こっているのです。

私たちは、この裁判の場面を通して、私たち人間の罪の現実を直視せざるを得ないのです。それは、私たちの悲しいまでの弱さです。私たちの中に、神様の前に「これがあります」と差し出すことが出来る何かがあるわけではないのです。そのことを受け止めなければならないのです。しかし、だからこそ、イエス様の十字架で捧げられる命が、他の誰でもなく、私たちに向けられたものであることを知るのです。バラバがそうであったようにです。ですから、このピラト御裁判の場面は、私たちの罪を証しているだけではなく、私たちの救いの恵みをも証している場所なのです。

私たちの罪を許すためにこそ、イエス様は十字架にかかれるのです。その恵みが示されているのです。イエス様は、私たちの、いや私の罪を解決するという目的のためにこそ、人として世にお生まれになり、十字架への道を一心に進まれたのです。この恵みを心の置きつつ、今年を受難週を共に歩ませていただきたいと願います。